

バッハ：教会カンタータ第93番「ただ愛しい神の統治に任せるものを」

この曲は、バッハがライプツィヒのトマス教会カントールに就任2年目の1724年の作である。三位一体後第5日曜日のためのカンタータで、同年7月9日に初演された。

ゲオルク・ノイマルク(1621-81)が作詞作曲した7節からなるコラールを原曲とするコラール・カンタータだが、無名の詩人によって第1・4・7節以外の節に大幅な改変・補筆がされた歌詞を用いている。

第1曲は合唱が、コラールの歌詞通り「**神の支配に任せる人こそ堅実な生き方をしているのだ**」と歌う。曲の構造は、ポリフォニーの変奏とホモフォニーのコラールが交互に現れる形式である。

第2曲も、コラール第2節の6行中4行を用い、バスのソロが「**不安、嘆き、悲しみなどは苦悩を増大させるだけだ**」と歌う。コラール歌詞の部分をテンポを少し落として歌い、その他の歌詞のレチタティーヴォと区別する。そして最後に付加された歌詞で「キリスト者は良い行いをしている。教えにかなう平静さで自らの十字架を担っているのだ」と、信仰に生きることの優位性を歌う。

第3曲テノールのアリアは、コラールの歌詞を2行弱しか用いていない。コラールは「**平静を保ちなさい。神は我らに何が欠けているかご存じです**」という内容だが、当曲ではさらに一步踏み込んで「神は決して我らを見捨てず、最終的には必ず救済してくださる」という確信を歌う。

第4曲はソプラノとアルトの二重唱で、コラールの歌詞「**神は正しい喜びの時を知っています**」を変奏で歌う。コラール旋律は弦楽のユニゾンで奏される。

バッハは後にこの第4曲をそのままオルガン・コラールに編曲している。「シューブラー・コラール BWV.645-650」の第3曲 BWV.647 がそれである。(ちなみにその第1曲 BWV.645 は、カンタータ第140番「目覚めよ、と我れらに呼ばれる物見らの声」第4曲の編曲である。)

第5曲は、歌詞の面から見るとこのカンタータの一番の聞き所であろう。コラールの歌詞全6行を用い、各行間に多くの歌詞が付加されている。テノール・ソロは、第2曲と同様にコラール歌詞をテンポを落として歌う。

このコラールの歌詞だけの意味をつなげると「**災厄の灼熱の中にあっても、神から見捨てられたと考えるな。常に幸福を味わっている人が神に守られる人なのだ、などと考えるな。主を信頼するようになればその後の人生は大きく変わるのだ。神はいかなる人にも終末を定める**」となる。

その行間に挿入された無名の詩人の詞が興味深い。「**富める者、空しい快樂に興じている者の最後の言葉は“鍋に死が入っていた！”となるに違いない**」とは傑作だ。ザマあ見ろっ、て感じ(笑)。これこそが実在したイエスと同じ、虐げられた貧しい人々の側に立つ精神なのだ。

コラール5行目は、直訳すると「**後に続く時は多くのことを変える**」だが、これだけでは解釈が難しい。しかしここに挿入された物語によって「**主を信頼すれば、その後の人生は変わるのだ**」という意味であることがよくわかる。

この物語は、このカンタータが歌われる三位一体後第5日曜日の聖句である「ルカによる福音書」第5章に書かれている。シモンは夜通し漁をしても1匹の魚も獲れなかったが、イエスから「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をきなさい**」と言われてその通りにしたら大漁だった。驚いた彼はイエスにひれ伏し「**私は罪深い人間です**」と言うと、イエスは「**恐れるな、今から後、あなたは人間たちを生け捕りにする者となろう**」と言った。以後シモン=ペテロはイエスの弟子となった、いう話である。

第6曲の元となったコラール第6節の歌詞は「**神にとっては物事は簡単だ。富める者を貧しくし、貧しい者を富ませる。神は真の奇跡の人**」というものである。神の全能性がテーマである。

それに対しこのカンタータの第6曲では、冒頭で「**私は絶えず神に頼る**」と宣言している。カンタータ全曲のテーマが「**神への信頼**」であることが、ここでも示されている。その信頼の理由としてコラールの「**主は真の奇跡の人**」の部分が歌われる。他の部分が八分音符基本であるのに対し、この部分だけ四分音符でコラール旋律が出てくる。

第7曲は、「**神に頼る者を神は決して見捨てることはない**」とコラール第7節を歌って、全曲を閉じる。

バッハ：教会カンタータ第4番「キリストは死の縄目につながれたり」

1524年にルターが作詞しグレゴリオ聖歌「過越の生贄を讃美せよ」(Victimae paschali laudes、復活祭ミサの続唱)の旋律に当てはめた7節のコラールを用いて、コラール変奏曲として作曲されている。冒頭にシンフォニアが置かれているのでコラール第1節＝カンタータ第2曲となる。

以下、コラールの各節の内容を簡潔に紹介する。

第1節「キリストは死の縄目にとらわれたが再び立ち上がった(復活された)」

第2節「我らは皆罪深いので、死を克服することはできなかった」

第3節「神の子イエス・キリストが我らの代わりにやってきて罪を拭い去り、死から力を奪った」

第4節「生と死の奇妙な戦い。1つの死(イエスの死)が死を食い尽くし生の勝利となった」

第5節「真の過越の子羊たるイエスの犠牲。その血が塗られた扉を突きつけば死を撃退できる」

第6節「よって我らは復活祭を祝おう」

第7節「我らは真正なる復活祭のパンを食べて良く生きる。

古いパン種はキリストの恩寵の言葉の側にあってはならない」

第5節では旧約聖書「出エジプト記」の内容を引いている。神がエジプトで奴隷状態にあったイスラエル人々を救うために、モーセを通じてファラオに対し「エジプト人たちの各家の長子を殺す」と予言した。その夜イスラエル人たちは旅の準備とともに「酵母で膨らませないパン、苦菜、焼いた子羊の肉」を食べた。その際、自分たちの家の扉に子羊の血を塗っておいた。その夜、主はエジプトを進み各家の長子を殺したが、血塗られた扉は過ぎ越して行った、という話である。

ユダヤ教における「過越の祭り」はこれを記念し、先祖の苦しみを分かち合うために家族とともに食事をするものである。イエスが逮捕される直前に弟子たちと食べた「最後の晩餐」は、この過越の食事であった。そこでイエスは弟子たちに自らパンを割いて「取って食べなさい。これは私の身体である」と言って与えられた。これが現在、キリスト教のミサで行われる聖体拝領の起源である。

第7節の「真正の Osterfladen」とは「ユダヤ教の過越のパン」ではなく「キリスト教の聖体拝領のパン」のことである。「キリストは自ら食物となって魂を養う」とある通りだ。

また「古いパン種は恩寵の言葉の側にあるべきでない」というのも、古いパン種＝ユダヤ教、恩寵の言葉＝キリスト教ということである。「マルコ福音書」第2章でイエスが語っている「誰も、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりしない。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ」という言葉に通じるもので、ユダヤ教とキリスト教を峻別する内容である。だから第5節で死に対して突きつける「血塗られた扉」の血も、イエスが十字架で流された血である。旧約の話の構造を援用しつつ「ユダヤ教とキリスト教は異なるものだ」と言明しているのだ。

さて、この曲について現存する資料は1724年もしくは1725年の再演のために書き直されたパート譜だけである。よってその作曲年代は推測・仮説でしかないが、バッハがミュールハウゼンにいた1707年か08年の作というのが有力な説である。バッハの数あるカンタータの中でも最初期のものである。

1685年生まれのバッハは1703年4月、18歳でヴァイマル宮廷楽団のヴァイオリン奏者として就職し、同年8月にアルンシュタット新教会のオルガニストに転職した。ところがここで、聖歌隊員の生徒と喧嘩沙汰となったり、一ヶ月の休暇を申請してリュベックまでブクステフデの演奏を聴きに行ったら休暇期間を大幅にオーバーしてしまったりと、数々の問題を起こし、次の職場を探すことになる。

するとそこに1706年12月、ミュールハウゼン市の聖ブラジウス教会オルガニストだったJ.G.アーレが死去し、同市参事会がその後任を募集する、という話を聞きつけたバッハはこれに応募し、1707年4月24日の復活祭の日に試験演奏を行うこととなった。

「そこで演奏されたのがこのカンタータ第4番である」という説を、ロ短調ミサの研究で知られるクリストフ・ヴォルフが説き、礪山雅氏もその著書『バッハ＝魂のエヴァンゲリスト』に書かれている。もしそうであれば、現存最古のバッハ作のカンタータということになる。

バッハはミュールハウゼンの職を翌08年6月までつとめ、7月にヴァイマルの宮廷オルガニストに転じている。よって08年の復活祭もミュールハウゼンにいたので、08年作という説も成り立ちうる。

しかし、ここで問題になってくるのがミュールハウゼン市内における正統主義と敬虔主義の対立である。正統主義がルター以来の伝統に忠実に、神を賛美する音楽の力を重視していたのに対し、敬虔主義は、霊的体験を重視するあまり、礼拝における音楽は黙想を妨げるものとして軽視していた。

同市内の2つの教会のうち聖マリア教会のイルマー牧師が正統主義なのに対し、バッハの上司である聖ブラジウス教会のフローネ牧師は敬虔主義だった。バッハは当然、正統主義であるから、上司とは常に対立状態にあった。08年6月25日にバッハが市参事会に提出した辞職願にも、「悶着を起さずに事が運んだためしは無かった」と書いているほどである。

この状況下でバッハが1708年4月8日の復活祭のためにカンタータを作曲したのだろうか。

バッハがミュールハウゼンで書いたカンタータには、まず07年7月の第131番「深き淵より」がある。

これは聖マリア教会アイルマー牧師の依頼で、5月末に起こった同市の大火後の悔い改めの礼拝用に書かれたものである。8月には母方の伯父の葬儀のために第106番「神の時はいと良き時」を書いた。その後は翌08年2月、これまた聖マリア教会で行われた市参事会員交代式のために第71番「神はいにしえより我が王なり」を書いた。そして同地を去る直前の6月5日、前任地アルンシュタットのシュタウバー牧師（バッハの結婚式を司式した）の婚礼に出席して、そこで第196番「主は我らを御心に留めたまえり」を演奏した。

ミュールハウゼン時代の作とされるカンタータは、第4番以外にはこれら4曲だけである。つまり自分の勤める聖ブラウジウス教会用のカンタータは他に1曲も残っていないのだ。もちろん現存していないだけで、全く書かなかったとは言い切れない。しかし書いたとしても、上司との「悶着」のせいで自分の思ったような作曲が許されず、そのためバッハ自ら残さなかった、とすら考えられるのではなかろうか。

上司の牧師とは対立していたバッハだが、彼の採用を決めた市参事会との関係は良好だったようだ。というのも翌09年の参事会員交代式のためのカンタータも、ヴァイマルに転職していたバッハが依頼を受けて作曲しているからである。「参事会が採用試験の課題曲としてカンタータを選んだとするならば、市参事会はバッハにカンタータの作曲を期待していたと考えられる」と礒山氏は書かれている。

一方、この曲はミュールハウゼン時代の他の4曲よりも遥かに優れているということで、もっと後の作であるとする学者もいるらしい。しかし筆者は、この作品が優れているのは、むしろこれがいわゆる Meisterwerk に相当する作品だからだ、と考えたい。

Meisterwerk とは英語では masterpiece、すなわち「親方試験作品」のことである。

中世においては、手工業に従事する者は、まず親方 Meister の工房に入って徒弟（見習い奉公人）となり、そこで親方によって職人として認定してもらう。職人となった後もしばらくはその工房に御礼奉公し、その年季が明けたら修行の旅に出て各地の工房で職人として勤め、腕を上げる。そして、「俺はこの街で親方になる」と決意したら、その街のギルド（同職の親方たちの組合）に親方試験作品を提出するのである。親方になるということは、その街のギルドの正組合員になることだからである。

そしてこの親方試験作品が、往々にしてその職人の生涯の中で最高傑作であることが多かったからこそ、masterpiece という単語は「名作、その芸術家の最高傑作」という意味になったのである。

ちなみにギルドや親方について音楽を通じて知りたければ、ヴァーグナーの楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」をご覧になる（お聴きになる）と良いだろう。この主人公ハンス・ザックスは、ルターと同時代に実在した詩人であり、かつ靴屋の親方だった。第3幕歌合戦の場で市民が歌う合唱「目覚めよ」の詩もザックスの作で、その内容はルターの宗教改革を支持し、カトリック教会を批判するものであった。

話をバッハに戻す。転職先を探していた彼は、ミュールハウゼンの試験演奏の日がちょうど復活祭当日だということで、まるで親方試験作品を作るがごとく気合いを入れてカンタータ第4番を作曲した。その結果、この曲は彼の数ある教会カンタータの中でも、最高傑作の1つとなったのではなかろうか。

形式にとらわれすぎて生硬である、と感じられるかもしれないが、それも試験作品だからこそ一分の隙も無いように作曲した、と解釈すべきであろう。

それにしても、こんな名作を作ってつかみ取った地位なのに、いざ就職してみたら「直属の上司に恵まれなかった」というのもまた“人生”ということか。